

大学基準協会相互評価申請書
点検・評価報告書(別冊)

2004 年度申請
清泉女子大学

I 本冊子の位置づけ

本冊子は、本学が 2004 年度に、相互評価ならびに認証評価を受けるため財団法人大学基準協会に提出した申請書のうち「大学基礎データ」を、点検・評価報告書の別冊としてまとめたものである。

「2 研究業績」および「3 教員の活動」は、大学基礎データの表 24「専任教員の教育・研究業績」、および、表 25「専任教員の教育・研究業績（芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員）」について、大学基準協会の指定する項目を盛り込みつつ、より一層充実を図ったものである。

II 「2 研究業績」の凡例

1. 掲載対象教員

平成 15 年 5 月 1 日現在、在籍する専任教員とした。

ただし、平成 16 年 3 月 31 日付退職の 2 名については掲載していない。

2. 掲載順序

文学部（日本語日本文学科、英語英文学科、スペイン語スペイン文学科、文化史学科、地球市民学科、教職課程、司書・司書教諭課程）、人文科学研究所、キリスト教文化研究所、言語教育研究所の順とし、その中で教授、助教授、専任講師別に 50 音順とした。

ただし、書式様式を異にする体育担当教員は末尾に掲載した。

3. 掲載内容

1) 「職名」は、平成 15 年 5 月 1 日現在のものとした。

2) 「大学院の授業担当」については、「有（博士・修士）」「有（博士）」「有（修士）」「無」のごとく記述した。

3) 「研究活動」については、以下のとおりとした。

① 平成 10 年 4 月 1 日から平成 15 年 5 月 1 日までの研究業績を掲載した。

② 平成 10 年 3 月 31 日以前の主要な研究業績についても、別枠にて掲載した。

③ 各教員の提出に基づいて、原則として【著書】【学术论文】【その他】【口頭発表】に区分し、発表年月順に記載した。

④ 【その他】には、（翻訳）（書評）（辞典・事典）（講演）等を記載した。

4) 「学会等および社会における主な活動」については、各教員の提出に基づいて、所属学会、学会・審議会等での役職名をはじめ、その他公的機関、民間の別を問わず社会における活動を記載した。

III 「3 教員の活動」について

「3 教員の活動」は文字通り清泉女子大学での教員の活動を教員個々がまず自己を客観的な検討の対象とし、現在の有り様を見つめ、自己の活動を総合的に記述し、明日の自己を明日の大学をよりよく生きるための最も基礎的な作業として行われる自己点検評価活動の一つである。この作業の意図、具体的な記述の様式は、この作業を依頼した文章におおよそ下記のごとき要項で示した。

一般に、大学人の職責は、

- ① 自己の専攻する学問の発展に寄与する研究活動、
- ② 学生に対する教育活動、
- ③ 組織としての大学の管理運営に関する活動、
- ④ 自己の修得した学問を様々な形で社会に還元する社会的活動

の4つとされる。

この4つの活動を総合的に記述し、自己の教員としての活動の総点検とするが、4つの項目を必ずしも等量で書く必要はなく、その年度それぞれの教員が力を入れている部分に多少のウェイトを置くことを可とする。

以下、そうした前提の上に、4つの項目において記述すべき事柄、留意事項を、下記のごとく指定した。

1. 研究活動について

記述内容：研究の軌跡・研究の現在・今後の計画

留意事項：単に研究業績を並べるだけでなく、自己点検評価を行う機会に、過去の自己の研究の軌跡を省み、現在の位置を確かめ、今後の計画を考えるかたちで、自己の研究活動を内外に開示する機会とする。

2. 教育活動について

記述内容：担当授業と授業内容の誌上公開（一部でも可）、課外教育活動等の記述、作成した教科書・教材・参考書等の記述、教育方法・教育実践に関する発表・講演等あれば記述、その他、教育活動に関する特記事項。

留意事項：大学全体の教育力の向上、強化を目指して、日々それぞれがどのような授業を行っているか、どのような点にどのような工夫を行っているか、授業内容、授業方法等を誌上公開し、様々な経験の蓄積を他者にも開き、大学全体の共有の財産としていく機会とする。

3. 管理運営活動について

記述内容：担当職務の記述、担当職務の上で気付いた問題点・改善策の提言等あれば記述。

留意事項：その年度、管理・運営上のどのような職責を担っているかは、教員評価に際して研究教育活動とあわせ総合的に顧慮されるべき点であろう。単に研究業績を並べることをもって教員評価とするならば、管理運営業務は大学人にとっていよいよ忌避されるものになりかねない。担当職務の記述を教員の総合評価の一環として位置づけるとともに、職務遂行上の気付いた問題点、生産的な改善策の提言などもいただき、キャンパス環境のよりよき整備、向上に役立てる一つの機会とする。

4. 社会的活動について

学問の社会への還元は様々な形であり得ようが、そうした多様な学問の社会への還元、あるいは多様な社会への寄与を自由に記述する。

「記述様式」は、A4判、一人見開き2頁ないし4頁、40字40行（オリジナル版）。

(本学独自の教員の活動に関する自己点検評価の活動であり、大学基準協会には、オリジナル版を別冊添付の資料として提出した。)

大学における教員の活動は、概ね上記4つの活動に帰着し、大多数の教員はその4つの活動にそれぞれ関わりをもつであろうが、キャンパスにおける大学人の活動の実状は、上記4つの活動、なかんずく、研究、教育、管理運営の3つの活動に関しては、教員個々において、あるいは、個人のレベルでもその年度によってウエイトの置き方にいかほどの傾斜が生ずるものであろう。もしも教員の評価が研究業績の多さを持つてのみ行われるならば、研究業績の蓄積に多くの時間を集中し、他の職務は閑却にされることも起こりかねない。また、大学の教育は大学が大学である限り特別の領域を除いて多かれ少なかれ研究活動を基底に持たない教育はあり得ない。いかなる事由を以てしても研究活動の全くの閑却は許されず、一定の時間の幅の中で研究活動の持続の検証は試みられなければならない大学人の責務であろう。大学人の多くは、あるいは、ほとんどは自己の専攻する学問に対する強い関心から学問の世界に歩み出たにちがいないところから、資質的にも管理運営業務からはやや遠ざかりたい衝動、欲求を内に懐くものがあり得たとしても不思議ではない。しかし、大学が一つの組織体であり、研究活動の拠点、次代の社会の担い手を社会に送り出す重い使命を持つ教育の場である限りよりよき研究教育環境の創造は研究教育に日々直接携わり、その担い手である教員の不可避のこれも重要な職務であろう。今日の世界的な転換期に際し、急速に変容する社会状況、国際社会の動向に即し、また学問諸領域における今日のめざましい進展の中で、新しい時代状況に即応する教育研究体制の新たな構築は私達の日々直面する現実の要請する重要な課題である。そうした中で多くの時間を割かざるを得なくなっている管理運営業務に携わった教員の職務上の活動を教員評価の中に正当に位置づけることも顧慮されるべき問題事項であろう。

そのような問題意識の上に、本学清泉女子大学における教員の活動が公正に表現されることを目指して、またこの評価活動が教員の単なる労務作業にならないことを志し、この作業に掛けた時間が明日の自己と大学の向上に資することを庶幾して、本学独自の教員の4つの活動を総合的に一つの場所で記述する、本方式の評価活動を行った。なお本評価活動は病気入院中の教員1名、1年間の海外研修中の教員1名を除いて、本学教授会全構成員の協力の下に行われている。

平成 16 年 3 月

清泉女子大学 自己評価委員会

